



Title	津軽の民俗芸能「荒馬」に関する研究 : Hobby Horse Dance
Author(s)	沼倉, 学
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16690号
Issue Date	2025-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16690
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98664
Type	doctoral thesis
File Information	NUMAKURA_Manabu_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：沼倉 学

主 査 教 授 池田 恵子
審査委員 副 査 准教授 崎田 嘉寛
副 査 教 授 小塩さとみ（宮城教育大学）

学位論文題名

津軽の民俗芸能「荒馬」に関する研究
—Hobby Horse Dance—

民俗舞踊「荒馬」は保健体育科の授業教材を通じて、全国的に知られるようになった民俗芸能である。本研究は津軽の民俗芸能「荒馬」について探究し、「荒馬とは何か」という本質的な問いを明らかにすることを目的としている。但し、民俗舞踊の本質とは何かという問いには幅があり、先行研究によれば、伝統的な流儀は構築され続け、流動的かつ可変的な文化的総体に他ならず、由緒や系譜の特定を第一とすることにそれほど意義が見いだされるわけではないとされている。また、「荒馬」の基本的芸態「馬の首の作り物と尻尾のついた楕円形の枠型を腰にくくりつけ、あたかも人が馬に乗っているように身づくろいをして踊る騎乗擬態の風流踊」は、世界的には「Hobby Horse Dance」として知られ、ユーラシア、ヨーロッパ一円の共通文化として存在することから、津軽の荒馬を世界的視野からも捉え、「荒馬」における人と馬との共生関係からこの民俗舞踊を捉えることに主眼が置かれている。また、「荒馬」は授業教材として全国的に知られ、民族舞踊教育研究会や学校体育同志会などの授業実践研究史を無視できないことから、授業教材化の試みを探究の一部に据えている。但し、授業実践研究とは区別し、実践研究以前に、対象教材の「荒馬」で何を教えるのかを追究することが本研究の問いをなすとされている。

論文は第一部と第二部から成り、第一部では、第一章で江戸時代の日記や紀行文を分析し、起源に関しては、虫送りやボウノカミ送りを通じて、1600年代頃までに虫害や疫病を祓う

目的で始まり、18世紀中頃までに風流行列を伴い、以後、娯楽化し、19世紀中期の弘前周辺では、行列の催しを隣町や村で競い合う中で荒馬が定着したとされている。第二章ではフィールドワークをもとに現存の荒馬の圏域毎の比較を行い、各地域に定着した荒馬を共通体系と下位体系から特徴づけている。

第二部「Hobby Horse Dance としての荒馬」では第一部で述べた津軽の風流踊、荒馬の特徴を相対化し、Hobby Horse Dance との共通性と独自性に論及している。具体的には、第三章において、Hobby Horse の概念が前近代的なスポーツ概念とかかわり、その底流には、人間が動物を制御、征服する関係性よりも、動物の模倣を通じた動物と人間との融合・混在性の表象や自然との共生意識を含意する文化であることについて述べている。ヨーロッパの民衆娯楽は、王と臣下、男と女、人と動物など日常の権威や正常とされる社会的地位が逆転する「さかさまの世界」を特徴とし、こうした「さかさまの世界」の趣きと津軽の「荒馬」の関係性についても考察している。第四章「荒馬に見る日本馬と人の共生関係」では、去勢せず、蹄鉄を打たず、自然の野馬の野性＝荒々しさを残したまま共存するといった日本独自の「野馬（のま）飼い」と呼ばれた馬産の特徴と荒馬の流儀の関連づけを試み、牡馬が軍馬となり、牝馬を農耕馬として用いることから、野間で育った荒々しい牡馬＝荒馬は主に庶民の手の届かない軍馬であったが、祭りの中では牡馬も牝馬も表現されることに論及している。また、青森県相内村の荒馬は、行列の歩みの途中でその場に寝そべる馬が手綱取りを困らせる場面を伴い、荒馬が「人と馬との関係性」の踊りであることを実証することに役立っている。

上記の考察は補論において、小学校高学年から中学 1 年次を想定した教材化の試みとしても提示され、単騎の荒馬踊り、手綱取りがついた荒馬の即興踊り、ペアの振付がある荒馬踊りへと発展したこと、牡馬か牝馬かといった雌雄の別、人と馬との共生関係について思考する教材提案がなされている。とりわけ、手綱取りと馬との即興の掛け合いはその年の人と馬との間で生じた出来事の表現が想起されることから、人と馬との関係性を意識した創造性に富む表現運動学習の一例が提示されている。

審査では、本論文が独自に明らかにした以上の長所を評価した。但し、授業教材化の一例の提示にとどまっており、教材研究を越えて、授業実践研究の蓄積を今後充実させていくことの意義も指摘された。しかし、著者の研究動機のもともとの原点が授業実践研究にあったことから、上述の指摘は今後の研究に信頼を委ねられるとして、審査委員会では、授業実践研究以前に必要とされる、「荒馬で何を教えるのか」ということの本質論に、「人と馬との共生関係」の歴史を通じて荒馬の特徴に迫ることができた点を評価した。

よって著者は北海道大学 博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。